

事業番号 1-3
細事業名 商工業振興事業
担当課名 商工観光課
会議内容 平成24年7月20日 事前説明会

事業担当課より説明

～ 質疑応答 ～

(評価者) 産業振興会に加入する団体、商工会は先ほど補助金が出ていると説明がありましたが、農業と林業と観光の各団体に対して補助金はどれぐらい出ているか。産業振興会への直接補助ではなく、産業振興会を構成しているそれぞれの団体への補助額です。

(担当) この事業は商工観光課で担当しているが、他の事業はそれぞれに担当があり、今具体的にいくらかというのは商工観光課では把握しておりません。あくまでもこの400万円というのは楽市に対しての補助です。

(評価者) 商工会に加入している事業者数はどのくらいか。

(担当) 商工会に加入されている事業者は1,426です。

(評価者) 商工会というからには商業と工業だけの事業主になるか。

(担当) まあ、商業、工業、サービス業等も含む中小企業の事業主さんです。

(評価者) それともう一つ、産業祭は12回目ということで、23年度は38,000人ということをお聞きしているが、過去五年間の推移も教えてほしい。

(担当) 平成18年度が31,000人、平成19年度が48,000人、平成20年度が35,000人、平成21年度が45,000人、平成22年度が52,000人。

(評価者) 先ほど産業祭での支出について説明の中で事業者からの収入が847,300円となっていたが、そうすると産業祭全体で事業者の収入はだいたいどれぐらい上がっているのかはわからないか。

(担当) 利益については、各事業者で様々で、ボランティアの方もあり、利益率等は把握しておりません。

(評価者) 産業祭の事業収入は、売上の何%かをもらっているのか。

(担当) はい。ただ、団体の利益率、いくらで仕入れたかというような細かな収支は把握していない。

(評価者) 事業所さんの収入は各団体によって売上の何%かというのはバラバラなのか。

(担当) 売上のうちから一定率を事務局でいただくのだが、そのブースを出された方がいくらで仕入れて販売されたのかという個々の利益までは把握してない。

(評価者) そのうちの何%かを市の方へ渡すということではないのか。

(担当) 売上の何%かは事務所へいくが、売上と、その原価、人件費もあるかと思う。

その差で各事業所の利益がいくらだったのか、プラスだったのかマイナスだったのかということは把握していない。ただ売上の何%かをいただくということ。

(評価者) 全体に言えることだが、補助金の使い方が数年前からどこの行政でも同じになっている。もらえるからこういう風に使っていこうということで使っており、活性化であるとかPRに努めますと言っはいるものの、やはり、補助金に対する明確な目標、その成果が見えてこないような気がする。毎年これだけもらえるから、これだけ出しておきましょうというようにどうしても聞こえてしまう。それから同じやり方、方法では右肩下がりになってしまうと思う。一皮二皮むきながら発展させていくのか、あるいは新しいやり方、例えば里山ブランドの新商品開発というような形でさらに活性化するのか。その活性化やPRは毎年もっと脱皮しながら、広く発信していかなければいけないと思うのだが、去年の右へならえ的な部分が非常に多い。それから人件費の占める割合が非常に多い。この辺のところをどう考えているか。

(担当) この事業には楽市の補助と商工会の補助があるが、イベントへの補助と団体の補助ということでそれぞれ若干性格が異なる。しかし、補助をする以上は精度を上げるべきだということは担当課も考えている。商工会について言えば、やはり商工会を通じて中小企業の実態を把握し活性化する、各事業者の企業活動を支援していくということで、具体的に各事業者にどういう対応をしたのかということについては我々も注意しているし、行政ができないところを商工会がされているということのを我々は理解して、それを施策に反映したい。そういう施策へ反映させるということが、補助金を出すメリットかなと考えている。地域ブランドが必要という商工会の意見で、河内長野市産品ブランドを立ち上げた。それはやはり商工会と各事業者の方々との間で、小山田の桃を使ったソースを作ってはどうか、それだけの桃ならブランド化しようかという話があり、そういった商工会の意向をキャッチして行政に反映させる、それが一つの具体的な成果だと思う。したがって産品ブランド以外でも、地域の活性化といった点で商工会からのご意見、実態を行政に反映し、何らかの成果生み出したいと思っている。また、産業祭においても、地域ブランドとして認定したものをブースで販売しようという動きも作っている。ご意見をいただきながら、補助金の成果が具体的に目に見えるよう、進めていきたい。

(評価者) 今の財政を見ると、いつまでも補助金に頼るという体質からどこかで脱皮しなければならない。それともう一つはアイデアがもう少しほしい。例えば人を集めるにしても何にしても、アイデアがもっと必要。お金が無ければ知恵を絞るというのか、アイデアを出す。例えばB級グルメでは、2、3年前に人口8万人程の津山市が、金土日の3日間で12万人ほど集めた。そういう大きな、2年後・3年後にこうしていくんだというものを。林業では、今チェーンソーの大会を全国2か所でやっている。

河内長野でも一度チェーンソーの大会をやってみるなど。ここで横串を刺して、寺ヶ池公園で大会をひらき、そこで出来上がったものを販売する。目新しい発想、アイデアというものをもっともっと検討していくべきではないか。パソコンが入ってからはポンとボタンを押したら昨年実績が出てきて、今年は日にちを入れ替えたならポッと同じのが出てくるのだが、何かに頼らない知恵の部分、アイデアの部分にもう少し比重をおいて、河内長野の活性化、PRを考えてほしい。

(評価者) 地域活性化のための事業だということで、先ほどお話があったようにB級グルメやご当地グルメというのが脚光を浴びている。河内長野ではまだまだこれというものが出ていないと思う。小山田の桃ソース、これはブランドになるかなと思う、それ以外に何か出てくるのか。それから研修や講演会を行っているが、その後の報告書は。その後の手ごたえというのか、こういう課題が見えてきたということがあれば教えてほしい。もう一つ、河内長野の地場産の爪楊枝等、いろんなお土産品を。今、型紙のファイルを売り出しているが、そういうものが電車から降りてすぐ買えるような所にあるのか。アンテナショップのようなところ。そういうものがあれば遠くから来た方も買いやすい気がする。

(担当) B級グルメについてはたくさんのご要望をいただいているし、提案もある。B級グルメをするには、様々な事業者、作り出す・供給する側のパワーが必要、一定量を供給できることが必要であることも事実。そのきっかけとして、「お菓子のつどい」という河内長野の野菜等を使ったスイーツの販売や、産品ブランドの認定を行ったところで、今ちょうど芽が出始めたところだと思っている。B級グルメにするには、やはりそういったものを使ってレシピを作成する、市民の方々のアイデアをいただいてレシピを作り展開していく、そういうことを進めていく必要がある。今まさにレシピについてのアイデア募集をしているところで、すぐにB級グルメをやりますとも今は申し上げられないが、そういうことも必要であるという立場に立って産品ブランドもやっているし、ジャムの認定の中でいろんなレシピを市民の皆さんから集めようという動きもある。今はスタートの段階。もう一点、商工会の事業の手ごたえについては、何名受講された、何件の相談があったという数字はある。それをどう行政に反映させるかということ、経営相談や商工会と事業者との話の中で、後継者問題や資金繰りの問題、この店舗にはどういう問題があるかというものの報告書をいただき、それを参考にしながら融資制度はこう、保証制度はこうというように行政が制度を設計していくということをしている。単に件数だけでなく、実態がどうであるかという経営診断の報告書をいただいて行政に反映させているということ。地場産品の販売は、今ちょうど河内長野駅、三日市町駅にサンブラザさんの協力でブースを設けていますが、ご指摘のように、駅で降りて買いたい、その方が目につく、それは我々も感じている。去年改装した観光案内所で、現在、爪楊枝等一部は販売しているが、産品ブランドも含めて販売はしていこうと考えている。

(評価者) 研修を受けてどういう課題が見えてきたか、課題を克服できる道筋は見えているのかどうか、手ごたえを知りたい。

(担当) その点については、次回報告したい。様々な検証はしていると聞いているが、具体的な中身は把握していないので、次回報告したい。

(評価者) 先ほどの売上の84万について、何%かを会へ支払うということであれば、だいたいそのブースでどれぐらいの売上が出たかがわかるのではないか。5万円で売って材料費が25,000円、売上が25,000円ですよね。その10%の2,500円を納めるというように、きちっと出てくると思う。商工観光課の女性たちもいつもすごく汗まみれになっていっぱいいろんなものを提供して、一生懸命頑張っていて、すごい売上が上がったという話を聞くが、でもそれがやっぱりきらく市でやったことに対しての何かもっと、自分たちが収益を与えたと喜ぶのではなくて、それを河内長野市民に対してこれだけの部分でこれだけ私たちは頑張ったのだけど、こういう風に使いたいというような、何かそういうものが見えたら面白いと思った。それと天野酒の方ですけども、あそこで今はまりこんでいるもので、「焼きねぎ味噌」というのがある。あれは非常に美味しく、あそこに行かなければ買えない。ああいうものをもっと前に出していつてはどうか。お酒はもちろんだが、河内長野にはこういうブランドがあるということをもっと前に出すための、そういうきらく市であってほしいと感じた。

(担当) 次回、楽市の売上に対して明確にお答えできるように準備します。天野酒、私も愛飲している。美味しい。やはりこういったものを市外に発信しなければならないと思う。広域で開催するイベントはたくさんあるので、そういったところに、市外に持っていくことを意識して取り組んでいる。また、観光案内所等も利用して置ければと考えている。

(評価者) くろまる塾で最初に講演なさったときに、まずは河内長野だけ、外には持っていけないとおっしゃっていた。それも大切なことで河内長野市民皆に愛用されているというのも大切。でもやっぱりどんどん発信していくのも、河内長野市の名前を売っていくことになるんじゃないかなと感じていた。いい品物がたくさんあるので、どんどん外に出せる商品にしてほしいと思う。

(評価者) 地域産業振興事業のふれあい楽市・きらく市について、本当にこの商工業、農業、林業、観光ということの横断的な取組みというのは非常に評価に値すると思っている。今回で12回目ということで、昨年と今年、一昨年と今年というように、どのようにこのイベントの改善がなされているのか、変化が起こっているのかということも過去の経緯を踏まえて教えてほしい。

(担当) 印象深いのはやはり、3・11の震災の後の現地を支援しようというブース。昨年は今年と違ってそういったブースの中で様々な団体が儲けを度外視して大槌町を応援しようとして盛り上がった。その時々、今年は何をしようということでも実行委員会

の中でいろいろ議論されている。たまたま昨日が今年の実行委員会だったのだが、「長野らしいものを売れないか」、「作れないか」、というご意見もあった。実行委員会の中で、マンネリではなく、改善していきたいというご意見が出る。実行委員会の中には農業の方もおられ、林業の方もおられ、花の文化園という施設の方もおられる。その中で例えば花をテーマに何かできないかという意見があり、行政はそれらの意見を聞いてどうするかを考える、行政主導ではなく、協働という形でそういった声を取り入れて変えていきたいなという意識を持っている。

(評価者) 行政は場を提供し、それを運営するための資金を提供する。でもこの4団体の方々が主体的にやらなければ、4団体の方々の交流は生まれえないという風に思う。行政はこの場を提供することに非常に意味があると思う。もう一つは、この400万円という補助金額は過去の推移として増えているのか減っているのか。補助金を出す側としてどのようにこのイベントを評価して、補助金の価格設定をしているのか。

(担当) 補助金額は定額で増減はありません。400万円が適正であるか、積算がどうかというのは返答を留保しますが、決して補助金だけでやろうではなく、販売であったり、各団体の負担金であったり一つのスタイルが出来上がったのではと思う。

(評価者) 今回12回目、10年一括りみたいなことがあるが、本当に定額でいいのか、もしかしたら500万いるかもしれない、600万いるかもしれない、もしかしたら300万で済むのかもしれない。次はどういうイベントにするのかということを経年検証する仕組みが市の方で要るのかもしれない。あともう一つ、今回の3・11の震災で、多分日本全国そういうテーマがあがってきた。会場のレイアウトを見ると、4団体が集まっているとはいえ、商工ゾーン、農業ゾーン、林業ゾーン、観光ゾーンというゾーンの括りがあり、一部で小山田産の桃ソースということで少し連携のようなものが見えてきた。もしかすると、共通のテーマを掲げて各団体で連携して一つのものを作ることも次へのきっかけとして必要なのかもしれない。次年度をどう改善していくかという一つの仕組みも重要。

(担当) 今お聞きした中で、確かに実行委員会、商工会の青年部の方々に汗をかいていただいているが、やはり活動がその中だけ終わっているのかなと思う。コンサル等、お金は使ったということでもないが、全く知らないアーティスト等に中に入っていたきこんな切り口はどうとかいうことを提案していただくのも、実行委員会そのものに刺激を入れることも必要かと思う。

(評価者) こういうイベントではプロデューサー機能が求められる。もしかすると自分たちで考え付いたアイデアだけでなく、外部にプロデュースをしてもらった方が、この4つの団体がそれぞれ持つ新たな魅力というものを見つけやすいのかもしれない。実はこれが埋もれているのですよということが、外部から見てもらった方がより出やすいのかもしれない。

(コーディネータ) 商工会の収支内訳のうち、人件費の4,671万円。これは何人分なのか。

どういう配分なのか。2, 748万円の事業の内訳、どういう事業内容になっているのか。その全容を教えていただいた上で974万円を皆さんに判断していただく必要があるのではないかと思います。次に補助金執行後ですが、事業完了報告書は出されていると思うが、その報告書の中身がどのようなものか、それを後ほど教えてください。これが私からの質問です。それでは論点整理に入ります。論点としては、結局は評価ということでしょうか。補助金は効いているのか、役に立っているのか、それをどう評価するのかということ。各農業団体、観光団体、商工団体等へ出ている補助金がこれ以外にもあるかどうかについて、調べて回答してください。そこで出てきた質問は、各団体に対する運営補助金が出ている場合、その運営補助金以外に事業補助金としても出すという、補助金の性格が違うのだらうとは思いますが、重複していないかをチェックするということだと思ふ。論点としてはいかがですか。この補助金を使うことによって毎年の成果、あるいは変化が評価される仕組みができているのか。それによって補助金の使われ方がより有効で効率的になり、発展する方向が見極められるのか。その仕組みが無い、内部評価や検証の仕組みが無いとするならば、いつまでも補助金に頼ってしまうということが皆さんが判定する上での焦点になってくると思う。

(評価者) それぞれの農業、林業、商工とか観光だけでなく、先ほどお話したような横串を刺すという方法が、もう少しあるのではないか。それともう一つは補助金も、例えば南河内一帯で、それぞれが持つ補助金を協賛ということでまとめて、1+1+1が3であるところを4にする方法を探る。それから商品開発が従来から同じで、一皮むけていない。やはりこれはメディアのニュースソースにうまく取り上げてもらえるような発信の仕方や、もの、イベントの内容というのがある。河内長野の持っている財産的なもの、例えば遊休地はたくさんあるだろうし、これだけ人が減ってきて、山間部が沢山ある。それで例えば観光でも高野山路線でやるというような目標に向かって、いろいろやらなければならないという声はいろいろ聞くが、飛び地になっているから仕方がない等、ややギブアップ的な発想も聞こえてくる。車社会の中で。

(コーディネータ) 論点整理を行っていますので、追加のご質問、ご意見は置いておいてもらえますか。時間が限られていますので。論点としてはそういうことでよろしいですか。

(評価者) 事業面の補助と団体補助について、団体補助の場合は成果というものは見えにくいと思う。商工会に対する補助については、新製品の開発も大事な事業だが、例えば非常に困っておられる商店の資金繰りの相談や経営の相談等がベースになっていて、それにかなり力をかけてやっておられると思う。これは見えにくいので評価も難しいが、そのあたりは考えなければならない。どこまでやっているかということ、市役所は問われるのだと思う。その相談の内容、成果が少しでも見えたらと思うが。

(コーディネータ) 次回までに出していただきたいのは、商工会の事業の中で4つ。相談事業と啓発、研修、もう一個は助成。それらの事業の内訳はスライドでは出ていたが、手元の資料には無いので内訳を示していただく。それから、それがどのような成果を生ん

でいるかという分析データ。単なるアウトプットデータの報告だけではわかりにくいので、出せるなら出してください。それから新商品開発あるいは河内長野ブランドの確立のための戦略や、商工会としての取組みに何かあるのか、あるいは無いにしても行政側にその新ブランド開発のための政策は何かあるのか、プランについてお答えいただきたい。その上で皆さんに評価していただけるのではないかと思います。